

令和元年6月18日現在

機関番号：62601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04532

研究課題名(和文) 21世紀型資質・能力を育成する道德教育カリキュラムの開発と実践に関する研究

研究課題名(英文) Curriculum development for moral education nurturing competencies for living in 21st century

研究代表者

西野 真由美 (NISHINO, Mayumi)

国立教育政策研究所・教育課程研究センター基礎研究部・総括研究官

研究者番号：40218178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル化が進展する変化の激しい今日の社会において、世界各国の教育改革では、資質・能力の育成を目指した教育課程の実現が課題となってきた。人格形成に関する教育を担う道德教育では、この課題に応える改革が急務である。本研究では、諸外国や国際的な機関、我が国の研究開発学校等で重視されている人格形成や非認知に関わる資質・能力を分析し、道德教育に求められる資質・能力の枠組みを検討した。

この検討を踏まえ、本研究では、従来の道德授業が価値理解中心であったことを課題と捉え、問題解決的な学習など多様な指導法の導入による主体的・対話的学習で道德性を育成する授業の在り方を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、日本の道德教育の学習指導要領は、道德的諸価値を学習内容として示してきたが、その学習を通してどんな資質・能力を育成するかは示されてこなかった。そのため、価値の理解自体が道德授業のねらいであるかのようにつまえられる傾向があった。

本研究は、道德教育の目標である道德性をこれからの社会に求められる資質・能力の視点から具体化するとともに、それらの資質・能力と道德的諸価値との関わりを示すことによって、学習内容である道德的諸価値と目標としての道德性をつなぎ、資質・能力を育てる学習活動を中核に据えた道德科カリキュラム開発の理論的根拠を提供する。

研究成果の概要(英文)：Society in the 21st century has undergone a great transformation with the progression of globalization and a knowledge-based society. Moral education is required to help children acquire the competencies to open up a new era in collaboration with diverse people. By investigating the non-cognitive competencies targeted in current educational reform both at home and abroad, the research found there is a growing consensus on the types of competencies to be nurtured. They are related to the qualities for living and cooperating with various people to enhance well-being of oneself and the society.

In order to achieve a qualitative reform of moral education, it is crucial to establish proactive and interactive learning using diverse methods of teaching such as problem-solving focusing on deliberative discussion among children. It is also important to take an integrated approach, so that cognition and emotional understanding on morality leads to practical action in a real life context.

研究分野：道德教育

キーワード：道德教育 カリキュラム開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

世界の学校教育では、OECDのキー・コンピテンシーや北米で開発された「21世紀型スキル」などを参照して、従来の知識中心の教育課程から資質・能力を育成する教育課程への転換が進んできた。我が国でも文部科学省に設置された検討会が、今後の学習指導要領の構造について、児童生徒に育成すべき資質・能力を明確化した上で各教科等における教育目標・内容を見直し、改善を図るよう求めた（「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会 - 論点整理」2014年3月）。

この流れを受け、道徳の教科化を決定した中央教育審議会答申（『道徳に係る教育課程の改善等について』2014年10月21日）は、これからの社会に求められる「資質・能力の育成に向け、道徳教育は、大きな役割を果たす必要がある」と述べ、資質・能力の育成を道徳教育の重要な課題として受け止めるべきであると明示した。「特別の教科道徳」の本格実施に向け、これからの社会で求められる資質や能力を育成する道徳教育カリキュラムの開発が喫緊の課題である。

2. 研究の目的

グローバル化と技術革新が進展する変化の激しい今日の社会において、世界各国の教育改革は、これからの社会で求められる資質・能力（21世紀型資質・能力）の育成を中心に据えたカリキュラム開発を進めている。本研究では、「特別の教科道徳」を新たに教育課程に位置付けた道徳教育において育成すべき資質・能力を明示し、伝統的な価値教育と今日的な資質・能力の育成を共に担う新たな道徳教育の枠組みを提起して、教材と指導方法の開発を行う。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するため、本研究を以下の三視点に基づく方法により実施する。

- (1) 価値と資質・能力をつなぐ各国カリキュラムの国際比較研究
- (2) 道徳教育で育成を目指す資質・能力の枠組みの構築
- (3) 育成をめざす資質・能力と道徳科の学習内容をつなぐカリキュラムと教材の開発

4. 研究成果

(1) 価値と資質・能力をつなぐ各国カリキュラムの国際比較研究

キー・コンピテンシーをはじめ世界の教育改革を牽引している資質・能力モデルは、定まった答えの見えない、複雑で不透明なグローバル社会の中で「よりよい社会と幸福な人生の創り手」（中央教育審議会、2016）となることを目指して開発されてきた。しかし、その背景にある価値観や人間像については、社会の変化に柔軟に対応できる多様なスキルを備えた労働力、国際競争に打ち勝つ人材など、就業能力（employability）を重視した資質・能力と自律した強い個人の育成を志向するものとして、その市場中心主義と新自由主義への傾斜が批判の対象となってきた。資質・能力モデルには、個人の幸福とよりよい社会を共に実現するという理想を目指しながらも、その方向が不平等を加速する能力主義につながりうるという危険が潜在している。

OECDのDeSeCoプロジェクトは、この課題を自覚的に引き受けて展開されている。同プロジェクトは、学校と社会との接続という問題意識のもと、単なる経済発展を越えた社会的進歩、すなわちよりよい社会の実現に向け、教育を「健康なライフスタイルやアクティブなシティズンシップに対する習慣、価値意識、態度を向上させるもの」（OECD, 2010）と位置づけ、個人の幸福（Well-being）の実現を教育の目標として、価値や態度に関する教育を推進している。

このプロジェクトは、これからの社会で求められる資質・能力をグローバルなものとして提起する一方で、社会で共有されている諸価値をコンピテンシーの枠組みを下支えする錨（アンカー）と位置づけている。グローバルでトランスナショナルな性格を付与されたキー・コンピテンシーをローカルな教育課程にどう反映させ根付かせていくかは、各国の教育改革が直面しなければならない課題となっているといえよう。表1では、OECDやEUなどグローバルな機関やプロジェクト等で提起された、これからの社会で求められる資質・能力を、特に自己（情動）や社会性に関わる資質・能力に注目して分類した（表1）。

表1 世界の諸機関で提起された人格特性や情意にかかわる資質・能力

| | OECD (2002) | EU (2002) | ATC21S (2012) | CCR (2015) |
|----|-------------|----------------|--------------------------|----------------------------|
| 自己 | 自律的に活動する | 進取の精神・起業家精神 | 創造性とイノベーション 人生とキャリア発達 | マインドフルネス、好奇心、勇気、レジリエンス、創造性 |
| 関係 | 異質な集団で交流する | 社会的・市民的コンピテンシー | コミュニケーション・協働（チームワーク） | コミュニケーション、協働、リーダーシップ、倫理 |
| 社会 | | 文化的意識と表現 | 個人の責任と社会的責任、シティズンシップ | |

これらのなかでも、特に注目したいのは、「21世紀型スキルのための教育と評価」(Assessment & Teaching of 21st Century Skills: ACT21S)である。このプロジェクトで提起された21世紀型スキルでは、資質・能力を4領域 - 思考の方法・働く方法・働くためのツール・世界の中で生きる - で構成された10のスキルとして整理し、さらに、このそれぞれのスキルに対応した、知識(Knowledge)、技能(Skill)、態度(Attitude)・価値(Value)・倫理(Ethics)がKSAVEモデルとして具体的に示されている(Griffin, McGaw & Care, 2012)。

また、ハーバード大学カリキュラム・リデザイン・センター(CCR)のC.ファデルは、世界各国における人格形成教育や資質・能力モデルを比較分析した上で、「教育の四つの次元」を新たな枠組みとして提起した。その一つである「人間性(Character)の次元」は、徳(資質)や価値観、能力を含めて次のように定義されている。「人間性教育の目的は、豊かな人生と社会の繁栄に向けて賢い選択をするための様々な徳(資質)、価値観(信念と理念)そして能力を獲得し、伸ばすことである」(Fadel et al., 2015, p.123)。このモデルでは、Characterとして、主体性(agency)、態度、振る舞い、心性、考え方(mindset)、パーソナリティ、気質、価値、信念、社会・情動的スキル、非認知的スキル、ソフトスキルなど広範な概念が包含されている。

以上にもみるように、学校教育で育成を目指す資質・能力は、知識・技能から認知(思考)スキル重視へと移行しただけでなく、人生と社会の幸福(well-being)を実現するための倫理や価値を含む人間性を視野に入れた総合的なモデルとして提起されるようになってきている。

(2)道徳教育で育成を目指す資質・能力の枠組みの構築

これまで日本の道徳教育の学習指導要領は、身に付けさせたい道徳的諸価値を学習内容として示してきたが、その学習を通してどんな資質・能力を育成するかは殆ど示されてこなかった。そこで、(1)で概観した資質・能力の分析をもとに、「特別の教科・道徳」において、「内容」である諸価値と育てたい資質・能力をつなぐための方策を検討し、以下の示唆を得た。

四つの視点で「育てたい力」を示す

OECDのコンピテンシーをはじめ、各国の資質・能力の枠組みは、思考力や言語・情報等特定の領域に関わる能力を別にすれば、「自己」・「他者(人間関係)」・「集団や社会・文化」という三つの軸に整理される。これらの資質・能力は日本の道徳教育の四つの視点 - 主として自己自身に関すること、主として他の人とのかかわりに関すること、主として自然や崇高なもののかかわりに関すること、主として集団や社会のかかわりに関すること - に対応しており、それぞれの資質・能力目標を掲げることによって、「内容」にあたる諸価値の学習を通してどんな力を育てたいかを具体的に示すことができる。さらに、諸外国の資質・能力の枠組みでは明示されていない「自然に関すること」については、ESD(持続可能な開発に関する教育)で提起されている資質・能力を参考することができる。

具体的には、例えば、「主として自己に関すること」については、「目標を設定して主体的に活動することができる」・「自分で意思決定することができる」・「主として他の人とのかかわりに関すること」については、「他者の多様な意見に心を開き、協同で物事を成し遂げることができる」など、いずれも「内容」を資質・能力目標に組み込むことが可能である。

その際、道徳の「内容」には、特に資質・能力と親和性の高い、いわば諸価値の中核となるような包括的な概念があることに注目したい。具体的には、自律、尊重、協働、公正などがそれにあたる。諸外国には、このような学習において中心的な役割を持つ価値や概念を「中核価値」(シンガポール)、「包括的概念」(イギリス)などとして提示している例もみられる。資質・能力目標を掲げることによって、実質的に価値の構造化を図ることも可能である。

問題解決的な学習を充実する

各国が挙げている「個人的コンピテンシー」では、様々な価値の葛藤する場面や状況に置いて、主体的に選択し、意思決定する力が重視されている。そして、これらの能力を育成するには、具体的な問題状況を批判的に考察し、自分なりの解決を見出していく学習活動が有効であると考えられている。

道徳科は、価値に関する学習を特質としており、葛藤状況を価値の視点で考えて解決していく力を育てる問題解決的な学習は、道徳的実践力を育成する上で大きな役割を果たしうる。私たちが日常で出会う道徳的問題は、様々な価値の中から自分は何を大切にしたいかを選択しなければならないジレンマ状況や、ある価値(例えば「思いやり」)を真に発揮するにはどう行すべきなのかという問いとして現れる。こうした問題状況を学習できる教材や学習過程を開発することによって、子供自身が価値と力をつないで考える学習を実現できる。

現代的教育課題を積極的に扱う

現代的教育課題に挙げられる、キャリア教育、ESD、健康教育、食育、法教育、消費者教育などは、いずれも育てたい資質・能力と価値の両方を含んでいる。従って、これらの課題を学習することで、価値とコンピテンシーをつなぐ学習を実現する可能性が開ける。

諸外国を見ると、例えばシンガポールでは、人格・市民性教育のカリキュラムの中で、情報モラルに関する学習を年間5時間設定するなど、一定の時間を現代的教育課題に充てている。イギリスでも、性教育や薬物防止教育、キャリア教育など特に重要な課題については必修と定めている。このように、年間授業時数の中で、現代的教育課題を扱う時間を一定時間指定することで、「内容」を個別的に学習するだけでなく、様々な価値が含まれる現実的な文脈の中で生き方や在り方について考える事が可能となる。この学習時間を学校が特に推進している教育課題と結びつけて展開することで、学校の創意工夫を生かしたカリキュラム開発も可能となる。

(3) 育成をめざす資質・能力と学習内容をつなぐカリキュラム開発

道徳科において資質・能力と学習内容（諸価値）をつなぐ授業を実現するために、上で検討したカリキュラム開発の原理を踏まえ、現代的課題を問題解決的に学習する学習単元を構想し、実践をもとに課題を検討した。

現代的課題には様々な課題が含まれるが、本研究では、学習指導要領で例示されている、情報モラル、科学技術と生命倫理との関係、社会の持続可能な発展、を中心に検討した。なお、「社会の持続可能な発展」については、これまで「持続可能な開発のための教育（ESD: Education for Sustainable Development）」として取り組まれてきたが、今日では、SDGs（Sustainable Development Goals）として重点化されるようになってきている。この目標には、環境保全、世代間や地域間の公平、多文化共生、公正で平和な社会など、多岐にわたる課題が含まれており、学校や地域の実態を生かした取組みが可能である。

三つの課題を中心に検討した結果、それらに共通する有効性として次の点が明らかになった。

第一に、現代社会の様々な課題には、多様な価値の葛藤が含まれており、複雑な現実的問題の学習は、現実の文脈で道徳的問題を考え、選択決定し、実践していく力を育てるのに適している。現実の文脈で諸価値を関連づけて問題を考える現代的課題の学習は、内容を個別に主題とすることで徳目主義に陥りやすい道徳授業の課題を克服し、子ども自身が諸価値を統合して考える授業を実現しうる。

第二に、学校の特色を生かしたカリキュラム開発によって、学校の様々な教育活動をつなぐ道徳教育を構想できる。現代的課題の学習は、道徳科の一時間の授業で完結するものではないからこそ、単元構想や他教科等と関連付けた総合単元的な学習が要請される。

第三に、知識理解と思考力、実践をつなぐ統合的な学習を実現できる。現代的諸課題で議論するには、内容に関する知識が前提となるため、解決や判断に必要な知識を身に付けたり、体験活動で問題を身近に体験したりしながら、問題解決を考え議論する道徳授業を実施することによって、知識・思考・実践を統合的に学ぶ授業が可能となる。

第四に、これらの学習は、これまで道徳授業の受け止めに課題があった小学校高学年や中学校段階の道徳授業の改善につながる。問題を多面的・多角的に考える思考力が育てられている子どもたちに、葛藤や対立のある問題を協同で探求する場を与えることで、問題解決に向けて共に考え続ける意欲や態度を育てられると期待できる。

以上を踏まえた上で、具体的な授業づくりにあたっては、次のような配慮も必要であることがわかった。

まず、意見が分かれる問題の決着を図るディベート型の議論ではなく、よりよい解決を共同で探求する議論を柱とすることである。道徳科における議論は直接に合意形成を目的としたものではなく、合意を強制すべきではないが、現代的課題の学習では、解決に向けた社会的合意形成の意義を学ぶことが学習のねらいの一つとなる。そのためには、異なる意見を尊重しあえる学級づくりの中で、相互理解と合意を求めた学びが展開されなければならない。

また、問題解決的な学習だけでなく、困難な課題に取り組み、成果を挙げてきた先人の功績に学ぶ伝記教材も、現実の問題を解決することができるという事例を知り、問題を解決しようとする意欲を育てる上で有効である。

これらの視点を踏まえて開発した教材と指導方法、その評価については、『「考え、議論する道徳」の指導法と評価』（教育出版）に取りまとめた。また、アジア太平洋道徳教育学会における発表やシンポジウムにおいて現代的課題に取り組む道徳教育の在り方として提案した。

引用文献

中央教育審議会. (2016). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）.

Griffin, P., McGaw, B. & Care, E. (2012). *Assessment and teaching of 21st century skills*. Springer-Verlag. (三宅なほみ（監訳）グリフィン, P.・マクゴー, B.・ケア, E.（編集）益川弘如・望月俊男（訳）（2014）. 『21世紀型スキル：新たな学びと評価』北大路書房）.

Fadel, C., Bialik, M. & Trilling, B. (2015). *Four-dimensional education*. CCR: Center for curriculum Redesign, Boston.

OECD. (2005). *The definition and selection of key competencies: Executive summary*.

OECD. (2010). *Improving Health and Social Cohesion through Education*, Centre for Educational Research and Innovation.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

NISHINO Mayumi, The challenge of developing meaningful curriculum initiatives for moral education in Japan, *Journal of Moral Education*, 査読有, No.46, 2017, pp.46-57.

西野 真由美, 道徳性を育む特別活動, *日本特別活動学会紀要*, 第 24 号, 2016, 査読無, pp.7-12.

西野 真由美, 21 世紀を生きる実践力を育てる, *道徳と教育*, 333 号, 査読有, 2015, pp.153-158.

〔学会発表〕(計 4 件)

NISHINO Mayumi, A whole-school approach to moral education when it comes to dealing with bullying in schools, The Asia-Pacific Network for Moral Education, 2018.

NISHINO Mayumi, In Search of a new approach to Moral Education in High Schools, The Asia-Pacific Network for Moral Education, 2017.

Visha Balakrishnan, Nobumichi Iwasa, Mayumi Nishino, Laurance Splitter, Xiao-lei Wang, Meiyao Wu, Cultivating Morality in the Asia-Pacific: challenges for change, The Asia-Pacific Network for Moral Education, 2017.

NISHINO Mayumi, New Curriculum Initiatives for Moral Education in High Schools, The Asia-Pacific Network for Moral Education, 2015.

〔図書〕(計 1 件)

西野 真由美 他 2 名編著, 教育出版, 「考え, 議論する道徳」の指導法と評価, 2017, pp.136-177.

〔その他〕

6 . 研究組織

科研費による研究は, 研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため, 研究の実施や研究成果の公表等については, 国の要請等に基づくものではなく, その研究成果に関する見解や責任は, 研究者個人に帰属されます。